女學雜誌

版權所有

各土曜日出版

第百六拾八號

當府内無郵稅

一册六錢

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 168. JUNE 29TH, 1889.

EDITORIAL:—Purity in Social Intercourse.

LEADING ARTICLES:—Improvement of Food.

CRITICAL NOTES: — Akashi-no-yuri. Society for Reforming Theatrical Plays.

MISCELLANEOUS:— "The Meiji Art Associatoin" "Beauties of Manner and the Soul of Pictorial Art." "Time Flies" "Love is Hard to Depict." "The Japanese Language."

DROLLERY.

CHILDREN'S COLUMN.

BIOGRAPHIES:—Marcus Brutus au Porcia.

NOVELS.

GENERAL NEWS.

第百六十八號目錄

社說 男女間の清徳

論說 食物改良論(津田仙、巖本善治)

批評 秋田婦人矯風雜誌○証詞の百合花○第三次演藝矯風會妄評

雜錄 明治美術會起る○風采の美、繪畫の神○日月は飛ぶが如し○戀情を描くは難し○忙中閑を出す○日本の言語○茶話三

兒藍 乙女亞利斯(波月子)

史傳 ブルータス及其賢妻

小說 酒鬼(藤菴主人)

開書 矢田部良吉君に與ふるの書(井上二郎)○能勢榮君に呈するの書(山下剛)

時事 一夫一婦制建白○能勢榮君を送る○疑惑を褻りたる理由相分る○此一事明瞭、彼一事曖昧○或は云く佛者賄賂を送りたりと○夜意○國風音樂○新觀念○劔舞を觀る○花柳夫人○支那亞片商業○家政學校卒業生

片々 養育院窮民の理髪○其他十件

WOMEN IN JAPAN.

(1) *A new Association has just been made under the auspices of two ladies respectively of Graham Seminary and Methodist school in Tokyo. Its object is to encourage women's social influence*

(2) *Mrs. Sasaki widely known in connection with " The Temperance Union," with the assistance of Mr. Furuta, is earnestly advocating reform in Japanese ladies' costume. Her plan is to substitute a new costume consistent with convenience, economy, grace and modesty in place of the present style.*

(3) *Mrs. Asai one of the editorial committee of the "Temperance Magazine" was elected vice-president of the "Temperance Union of Tokyo." It is not certain whether she will resign her other position to take up this new one.*

(4) *Political compstition is carried out so far in Kumamoto that it extend to the choice of maid-servants.*

(5) *Two political men of Osaka have advertised for lady-lectures on political questions. They are required to be under thirty years of age, to be in sympathy with the principles of the old Liberal Party, to sustain an irreproachable character, and to be intelligent and eloquent.*

(6) *A new society called "The White Cross Society" has been begun in Niigata, the object being to advocate temperance and social purity*

(7) *The new building for the Peers' School soon to be completed is estimated at 87000 yen.*

(8) *The buddhists of the Jōdo sect are planning to institute seven religious schools in different cities over the Empire. These schools are intended to educate both sons and daughters from ordinary families.*

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百六十八號 明治二十二年六月廿九日發兌

社説

○男女間の清德

吾人は素と木訥なる田舍漢なり、初めて東都に出でたるとき喫驚したると頗ぶる多し、中に就て其の尤も多く喫驚したるものは男女相見るの風躰にてありき、見よ東京市人の街上を行くや、一婦人向ひ來るときは先づ踵を立てゝ怨望す、近づけば則はち正眞面に熟視す、過れば一顧し再顧し尚ほ遥かに目送して立つ、而して後ち其同伴者あらば批評猥褻の辭ば喃々として止まず。吾人初めて之れを見て厭惡に堪へず、只だ思ふらく之れ勞夫役者の如き下等生計の人々にのみ止まるとならんと、安んぞ知らん都門に慣るゝと彌よ久しうして彌よ多く此の醜躰を見んとは、彼の高帽を戴ける堂々たる紳士も、車馬急走の一瞬間尚ほ眼こを放たざるの地あり、而して如此き紳士諸君の會談するところを聞けば、品評淫話、古沼の如く澱み臭風の如く起る、吾人いよ〳〵厭惡し、眞に痛歎の念ひを禁ずる能わざりし也。

試みに一二上流の紳士貴婦人の面貌を窺ふに、何ぞ其のチヨロケて淫相あるや、請ふ見よ魁偉凛々として怒れる獅子の如き男子果して幾干ある、風采清高鼻目潔として天の使の如き女子果して幾干ある、吾人嘗て辨才天の圖を見る、辨才天は是れ日本人が淑德婦人を理想するの最清理想にあらずや、而して其の相貌の遊妓を距る所ろ幾干もあらず、又嘗て神社佛閣に行て所云る善男善女の顔ばせを窺ふ、嗚呼彼等の相見るや竊むが如く、彼等の眼こは不潔を含めり、況んや祭禮法事あるときは藝妓娼妓先づ第一に奔走し、善男後へに尾して團扇を以てあふぐ、平素神前佛壇には藝娼妓の寄附物を掲げ、其名表の多く存するを以て窃かに神佛の靈驗を誇る。嗚呼都門上流の人如此きか、都門人士の理想如此きか、都門理想上の宗教如此きか、如此くして男女間の清德を望むは猶ほ濁源に清流を要むるが如し。

日本國中に於て、都門ひとり如此き弊風あり、田舍地方悉とく清めりと云ふにあらず、然れども都門の弊風の甚しきと蓋し全國に冠す、而して中央集權の感化流れて全國民の頭上に溢れ渡るが故に、此の弊風は年々四方に瀰漫して、今や田舍に於ける清德も亦大ひに退ぞき、姦淫の空氣一往一來して忌まわしき流行の風となり、國中皆な殆んど相劣るなきの不德に

墮落し去らんとは爲す。

吾人確く信ず、姦淫は猶ほ精神上のコレラ病の如し、一と度び之に罹るときは、既に正義を確守するの念を失す、良心とろけ、意思腐り、冷笑寒舞して全身悉とく緩るむ、たとひ之が爲に未だ肉躰上一種の惡病を發するに至らずとするも、精神既に碎たり、最早や正大堂々の事業を成就するに堪ず、何んとなれば彼れ既に眞愛と肉愛とを混淆したり、彼れ既に自ら肉慾に制せられたり、彼既に人の魂しひを無みしたり、彼すでに人を玩弄視するに慣れたり、彼すでに一夫一婦の極高點より發し來る極めて潔ぎよき淸風の味はひに感ぜず、彼すでに男女双らび存する天の最も秀ひでたる攝理の蘊奥を悟るを得ず、要するに彼れは悉とく其の淸潔秀美なる養ひを棄てゝ甚はだ惡むべきの惡養料を取たれば也、故に彼れの如き人物は、巧みに此姦淫世界に游泳し、甘く俗流の好意を博取し、時に或は方便を以てベーベルの高塔を築くことあるべし、然れども如此き事業は國家の眞事業にあらず、其の一朝にして俄落し去らんと極めて明白なり。若し夫れ人の魂しひを尊とみ、人中の眞人を愛し、天の正理を守り、國家万世の大道を履み、只だ正しきとの爲に犠牲となりて成し遂ぐべき正大の事業に至りては、彼の姦淫の人の決して成就するとを得ざるもの也。　姦淫の害及ぶ所ろ骨髓に入る、而して世人多くは之を辨ぜず、放言慢罵して磊落を裝ほうと云へども、見よ我國の士氣の振はざる、少年の俊氣なき、卓拔なる正義の現はるゝ稀れなる、多くは是れ其病元を此の姦淫の惨毒に發するにあらずや。故に日本人民をして眞面目たらしめ、剛毅たらしめ、偉男子たらしめ、烈貞ある秀夫人たらしめんとせば、先づ男女間の淸德を確かにするに非ずんば能はず。

日本國に於て此問題を考ふるの必要なるや數年一日の如し、然れども現今の如く太甚しき風説頻々たるときに當りては此一問題に着目するの必要更に尤も切なるにあらずや、試みに問ふ、天下の論者は之を如何せんとする乎。

或は云く、夫れ如此くなるが故に男女をして決して近づかしむる勿れと云ふと。　蓋し如此き論者は男子を昔しの如き沙漠界に獨り躍舞せしめ、女子を固たく閨門の内に閉ぢ込め置き、全く兩性の交通を遮斷して漸やく其淸德を維持せんと欲す、嗚呼文明の風決して日本城裏に吹來ることなく、四海の景狀只だ昔しのまゝにて頑存し得べくんば可也、苟しくも然からず、すでに港を開き、すでに政府を開き、既に議會を開き、

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

すでに全國中を開き、万事悉く明開公開するの時勢滔々して襲ひ來るときに於ては、何如に如此き遮斷法を行わんと欲するも最早決して行ふとを得ず、よし今日に於て暫らく之を遮斷するも明日に於ては自由に交通せしめざる可らず、既に自由に交通するの日に至りて元と遮斷せざる可らざりし兩性を忽焉として合せしむ、害の現れる丶一日遲きのみ、瘍を破る一日後れたるのみ、未だ之によりて安心するとを得ざる也。况んや如此きは人の自然性に反し、國家經綸上に大損害あるをや。

夫れ既に遮斷法を行ふ可らず、然らば則ち之を何如にすべきや、吾人嘗て男女交際論七篇（女學雜誌第百十二號以下七冊）を説く、其効益の第二に云く、

故に今の如く姦淫の空氣の濃厚なるは、一つは男女間の情交の樂しみなかりしに由り、一つは肉交の外に男女の接すべき方便なかりしに由る。思ふに男女相慕ふの天性は素と其肉交を望むが故にあらず、實は其情を通じて、一日片視の間、美妙言ふ可らざるの味ひを求めさする天の奬動機と云ふべし、故に若し年少の男女をして互に情交を爲さしめたらんには、其清潔なる應對の間に、既に胸中に蟠かまる一大盤石を取去り、心氣すが〳〵として、爽快の感覺油然として起り、彼の肉交なるもの丶實に下賤汚劣なるを感ずるに至るを常とす。」蓋し男女すでに年に達して情交の時代となれば、是れ天命の彈機正に發するの時たり、此時男女もし相面會して談話應接に其情を慰さむれば、心中の鬱氣は乍ち洗ふが如くに散ずるなり。然るに當人も父母も彼の人情を知らざる所ろの聖人も、此の情交念の發作を以て直ちに肉交に陷いるの誘惑と心得、則ち此時より彌よ男女の相見るを嚴禁するを法とす。」之を以て、情交によつて散じ得べき働らきを肉交ならずは滿足しがたきものと誤認し、當人も亦何より早く此の肉交を望み、望んで之を得ざるものは顏色いよ〳〵青く、恍惚として無名の奇病となり、其の亂暴なるは遂に穴隙を鑽て不埒の行ひを爲すに至る、憫れむべき哉……故に男女の交際は情交を盛んにするもの也、情交の盛んなるは肉交の奴隷を減ずるもの也、肉交の減じて情交の盛んなるれ、人いよ〳〵其靈を發達していよ〳〵下等動物よりして遠ざかるもの也。左れば男女交際は避雷針の如し、陰陽霹靂の怒氣此より散ず、男女交際は天使の案内の如し、人間導かれて天に登り、其足いよ〳〵地

三

を離る……

吾人深く男女交際の益を知れり、故に亦た深く其の恐るべきとをも知れり、同じく男女交際論の危險の上に曰く、

……特に其肉體の組立に至つては、愛戀の情一たび動くや彈機乍ち發し、冬天急に春を回し、沙漠頓に花を生ずるの狀なきに非ず、即はち是れ草木の花に於て存するの用意亦同じく人類の男女間に於て存するものたるを知る。之を以て男女交際の効益は、或限りに至る迄で男女を接近せしむるが爲にして而して其危險は此の限りを立越て彼等を接近せしむるが爲に原づく、故に其尤も効益ある所ろは即はち其尤も危險ある所ろなり……男女交際は天の使にして亦惡魔なり、其一つの手には經典を有す、更に一つの手には劒を提ぐるが如し、而して彼れ揚言して云く汝ち此を取らずんは彼を取れよ、天に上らずんは地に墮落せよと、眞に恐ろしき怪物にはあらずや。只だ夫れ西洋文明國の多くに於ては、一に、宗敎なるものあり、能く人心を制す。二に輿論の勢力なるものあり、能く人心を壓ゆ。三に、男女相敬するの風あり、能く其相侵すを止む。四に、習慣なるものあり、能く男女をして其男女交際あるものに慣れしめたり。五に、嚴重の禮式あり、能く之を以て亂離不屆の我儘を禁ず……然るに我國の急激家は、國に未だ彼の五つの美を存せざるにも係らず、彼の五箇の巡査の巡行なきにも係らず、西洋に於て尙ほ現に男女交際論の未決なるにも係はらず、既に尤も急激に其交際を主張し、尤も急激に其方便を實行し、且つ尤も急激に其効益を認ため、而して尤も無頓着に其危險を看過す、之れ抑そも何たる事ぞ。

吾人が男女交際に對するの意見夙に如此くなりし、之を以て舞蹈會に反對したり、青年男女の交際會に反對したり、握手接吻其他の西洋禮式に反對したり、而して希ねがふ所ろは、宗敎の制力更に增大し、輿論の現想更に純潔となり、女子を器械視するの風速かに減じ、交際上の嚴密なる禮式習慣の早く固定せんとにありき。

故に今日に於て吾人が熱望する所ろのもの亦た之に過ぎず、即はち一方に深く男女交際の利を望むが故に成べく强よく之を行はらしめんとを欲し、同時に他方に深く其弊を憂ふるが故に成べく嚴に之を制せんとを欲す、左れば今日の男女交際に對する先進者が責任とする所ろは、當に細かに人情を察し、習慣に掛念し、男女をして彼の不測の罪惡に墮落せしめざ

るやうに爲しつゝ、則はち亦た可成く清潔なる男女交際の方法を實行せしむるに在り。

凡そ進歩する所ろ必らず反對なかる可らず、改良する所ろ必らず戰はざる可らず、故に苟くも數百年來の舊習慣を破り、今の如き古來絶類の大改革を行はんとするに當りては、之が爲に幾多の反對に會し、且つ目覺しき戰ひを爲すは當然の事なり。左れば男女交際上の大改革を實行するに際し、或は非られ、或は罵られ、或は惡風評せらるゝと固より必らずや之れあらん、抑そも何人も如此き反對を故さらに求むべきにあらずと云へども、すでに正當の進路に向ひ、着々たる進歩を爲し、啻に天に恥ぢざるのみならず、併せて其方法に恥づるなきの施行を行ふに於ては、世の改革者たらんとするものは當に甘んじて之を斷行すべし、而して如此き改革を賛賞する最も開化したる新聞紙の如きは、亦宜しく如此き斷行に同意して深く人心を導びくに任ずべし、此れ今の如き時世に當る總ての改革者相助くるの覺悟にあらずや。

此時に當り、女學校に男教員を置くと勿れ、教會に男女相會して賛美歌を歌ふ勿れと云ふ如きものあるに至りては、吾人其の頑として毫も改進の氣象なきに驚ろかざるを得ず。夫れ學校教會の如きに於てすら尚ほ男女相近づく可らずとする乎、左らば今の日本に於ては最早毫末も男女交際を行ふべきの地なかるべき筈なり、吾人は日本に姦婬の空氣瀰滿するに歎ず、然れども其の之れあるが爲に如此く太甚しき保守論を發する迄の必要を認たむる能はず。

教會の事は暫らく言はず、彼の女生教育の如きに於ては、方今尤も男教員を可なりとす、此は本邦に未だ多くの女教員なきが爲にのみ云ふにあらず、女生脳心の開發は男教員の手によらずんば十分ならざるが爲に然か云ふのみ、抑そも教員は畨人にあらず、若し女學校に幽閉せられたる女生徒を監視するのみにてあらば、之に女典獄を用ゆるは極めて適當の事なり、好したとひ男性を用ちゆるとも彼の宦官の如きを使はんとこそ相應あらめ、然りと云へども教育は決して如此きものにあらず、成るべく十分に人の靈脳を開發し、其の智徳をして尤も完全に發達せしむるにあらん、左れば之に尤も相應するの教員を撰び、而して今に於ては男教員の尤も能く之に適當するが故に則はち男教員を撰用するは正に至當の事なり。

然りと云ども、其教員にして不適當の人物にてあらば別に言ふ迄もなし、例せば嚴正謹密の注意を要す尤も甚しきの女學

校に於て、亂暴不注意なるの男教員を用るとせんか、如此き教員は其男たると女たるとに拘らず、之が其校に弊害を惹起するは勿論の事たり。若し夫れ一層の太甚しきに至り。此教員にして道德堅固の人物にてあらざりしとせんか、然らば亦た其の男たると女たるとに拘はらず、校中に不德の感化を流布すると全然同一なり、只だ此の一事によりて女教員を可なりとするは尤も愚なり、誰か女教員に過ちなしと云ふとを得んや、總べて不德ある教員は男も女も老ひたるも若きも決して學校教育に關係す可らず。

之を教育上の利害に就きて考ふるに尙如此し、況んや今ま男女間の淸德を淸くし、更に之に對するの輿論の邪推を拂ひ、此の日本男女をして啻に行ひに淸からしむるのみならず、併せて今の如き不潔に導びくの感想推察に滅せしめんとするに當り、上流士君子の公論ずる所ろ甚はだ鄭重を失し、只だ影によりて實を邪推し、男女相談ずるを見れば乍ち既に之に惡しきとありと速了するが如きあるは、今の言論社會の爲に尤も歎息すべきとにあらずや。讀賣新聞記者は高等女學校問題の判斷として實に左の如く決言せり、

西哲の語に曰く過去をして過去を埋葬せしめよと、高等女學校に關する世間の評判は少しく過失なりしが如く其校長教頭が輿論の爲に蒙らされたる制裁は少しく過酷なるが如し。

吾人は烱眼なる讀賣記者が先づ如此く看破したるに喜こぶ、實に此回の如き風評を有の儘に記載し、而も甚しきは一層の惡風評を製造し、僅かに一二の過失ありしによりて天落の攻擊を課し、啻に角の一分を矯めんと欲して全貢牛を殺さんとするに至りては、吾人今の新聞記者足下の爲に大ひに遺憾なき能わざる也。

吾人は矢田部校長に勸告したり、何んとなれば天皇陛下の一臣にして其の學校に對する惡風評を如此く頻多ならしむ、たとひ決して其事實なしとするも臣民の分必らずや職を辭せざる可らざれば也。吾人は野勢教頭を嚴責したり、何んとなれば其の女子教育の理想彼の奇文に現はれしが如くに汚劣ならば、政府が高等女學生を養成するは實に日本現今の大害なりと信じたれば也。此等の言、吾人自から省みて毫末も恥る所ろなく。之を數十日前に公言したる如く今日も明らかに斷論す。然りと云へども彼の「濁世」以下の風評の如きに至りては、吾人之を兩君の爲に怒り、高等女學校の爲に怒り、文部省の

爲に怒り、日本女子敎育全躰の爲に怒るなからんとするも得ず。謹んで天下文筆の士に訴ふ、願くは自今如此き風評を記することの極めて細心ならんことを、何んとなれば如此き風評の輕々として公けにせらるゝは、敢て男女間の淸德を淸くするの寸效なくして、寧ろ男女交際に對する世人の感想を汚穢ならしむるの万害あれば也。

吾人は各敎會に勸む、男女信徒の集會する尤もよし、宜しく安んじて集會せよ、亦た各女學校に勸む、男敎員を用ゆること尤もよし、宜しく安んじて良敎員を用ひよ、但だ夫れ敎會は敎會らしく一人の惡しきものなく、學校は學校らしく一人の不潔なる敎員をも使ふなかれ、若し不潔惡德の人を存するとせば、假令ひ之を女性のみにすとも、好したとひ之を男性のみにすとも、其德や決して淸きを得べからず、弊害の發する敢て增減なき也。吾人は昔し彼の男女交際論の結末に於て左の如く述べたり、

吾人は今の日本男女交際をして、一躍して西洋風の男女交際たらしむるの危險なるを信ず、然れども之を直ちに西洋風の男女交際たらしめて而して尙ほ西洋風の禮式を以て之を制限することだになくんば、其大危險は抑そも幾千ぞや。

聞說く近來(明治二十一年七月)府下男學校の生徒等にして、種々の男女交際會樣の集會を發起し、自分等周旋方となり、玆に年少の女生を會して、自由に談話し演說し奏樂し遊び廻り、而うして文明の神髓を得たりと心得るものありと、嗚呼未婚の少年にして男女交際會の幹事となり、未婚の年少女子にして一人之に臨み、斯て和樂して以て文明ありと云ふもの、天下何れの文明國にか之れあらん、吾人は只だ其の日本國の現今に行はれつゝあらんとするを聞くのみ。斷言す、吾人は道の爲に此等の會合の不都合を鳴らし、其弊害を暴露し、其改良を希望するに於て、毫末も遠慮する所なからんことを期す。

吾人が精神は數年一日の如し、若し實に惡事あらば何すれぞ之を筆誅せざらんや、只だ無事に製造し、不要に慷慨し、私交上の不快によりて公けに責罵し、平地に波を起し、波瀾化變の現象によりて快と絕叫するが如きは、吾人が死すとも敢て爲すを得ざる所ろ也。

前號に掲げたる箕作佳吉氏の論說「女子敎育論時弊」の一篇は去四月一日成立學舍女子部卒業式の際演說せられしものゝ筆記にして素と「女子敎育に對する一二の卑見」と云へる題なりし也、前號の如く記したるまゝにては昨今の時弊に對するものゝやうに見へ宜しからず編者の誤記に出しに付此に正誤するもの也

論説

○食物改良論

津田仙
巖本善治　同著

第三章　食物の概論

人の身躰は猶ほ煉化石を以て搆造したる家屋の如し五躰和合して一身を爲すと雖も然れども五躰を組織する所の皮、肉、血、骨ハ皆な數千億万の小煉化石(之を細胞と云ふ)より成立つものあり而して家屋中の煉化石を日々所々より抜出し之に代りて別に其新あるものを挿入せば家屋の結搆は依然として元の如しと雖ども數年ならずして全躰悉く一新するが如く人の身躰も亦た日々に其の細胞を變化して新陳相交代し大凡そ七年にして全身の肉骨悉く一變するなり人若し食物に茜草を和して食用すると久しければ骨の一部分赤色に染るに至るを以て之を知るべし蓋し茜草を食して骨を染るより人の骨の新陳交代するとき何處より生じ何の邊より消滅するか又何年にして全く一新するかを發明したりと云ふ此故に日々に呼出する所の息氣朝たに泌出する所の屎尿全日の勞働に要すべき力量及び同時に發出すべき汗水等に於て舊細胞中に存したる炭素、窒素、水分、礦物の類を斷えず身躰外に放出するなり試に鏡に手を觸るゝ時は忽にして曇りを生ず是れ身躰の一部分々泌して飛散し鏡の面の冷かなるに觸て水となるが故なり此の故に亦た日々に飲食して欠くる所を補塡せざる可らず然らざれば喩へば煉化石を抜き去りて別に新品を挿入せざるが如し此に至りて身躰の勞死するは恰も如此して家屋の壞倒するに異らざるなり。

人の身躰は躰質と躰温との二者ありて初て生存するを得るものなり故に之が欠乏を補塡すべき食物も亦た此の二者に對して供給する所なかる可らず此を以て古來人の食用すべき食物の効徳を大別して一に躰質を生造するとなし二に躰温を發作するとなしたり此故に食物中の成分にして右第一の効徳を呈すべきものを生躰質即ち「ヒストゼ子チック、マッター」と云ひ右第二の効徳を呈そべきものを發温質即ち「レスピラトリー、マッター」と云へり。

此故に食物の成分を小別して蛋白質（炭酸水窒の四原素を以て成りし時としては多少の燐及び硫黄質混交す）脂肪質（動植物の脂及油）澱粉質(炭酸水の三原素を以て成る澱粉、糖類、護漠類之に屬す）及び無機質（水、並に食鹽、燐酸石灰類、硫酸石灰類及其他）の四となすと雖も此中脂肪質と澱粉質とは之を併せて前に所云る發温質となし蛋白質は之を生躰質と

あし無機質中の水及び諸の礦物類は皆躰質中に含有さるべきものなるを以て亦た之れを生躰質中に納むるを得べきなり然れども此四種は或ハ時に生躰質となり或は時に發温質となるが故に固より斷えず一効德を呈して他を爲さゝるが如きにあらざるなり。

然るに人の其躰を造り其温を發するが爲に需要すべき所云る四種の成分なる者の分量は時と所と人とに由りて各相違あるが故に一二種の食物を食ひて此四成分を恰も好く供給せんとは到底能はざるとなり必ずや數種の食物を合食し身體をして其需要する所の分量を其中より收得せしめざる可らず蓋し乳汁を除くの外如何なる食物と雖も一品の成分にしてよく人躰の需要に恰好せる分量の割合を存するものなきなり思ふに人類の歯は肉食に適し亦た草食に適す此れ實に造化が人をして肉に偏せず草に偏せず獸、鳥、魚、鼈、穀、菜、草、油等を合食せしめんと欲するものなるべし。

此故に單一の飼料を以て畜ひたる家畜は決して肥太せず時としては此が爲めに倒死するとあり曩にグロッス、スターク兩氏が此理を試驗したる所の成績載せて解剖生理全書に在り此れ爭ふ可らざる事實にして諸生理學者の許す所ろ吾人の常に注意すべき所なり。

然れども肉食と草食の孰れをか本食として其の孰れをか主要とせんと云ふに草食は到底肉食の滋養多きに及ばざると亦た明白なり蓋し肉類には人躰を生造すべき蛋白質の存在啻に草類に優るのみに非ず此の蛋白質の消化して結局人躰の滋養となるべき分量も亦た肉類に多くして草類に少し今ま先づ米と牛肉との中に存する蛋白質の割合を比較すれば

米	六、一〇	肉	一八、〇〇

大略右の如し米に存するの分量固より肉に存するの三分の一に過ぎざるなり然るに此の少量なる蛋白質の消化分割は亦尚ほ肉に於けるものゝ消化分割の多きに及ばざること

米	消化せしもの	七五	消化せざるもの	二五
肉	同	九七	同	三

大略右表に掲示するが如し

且や此は尚ほ未た調理せざる米と肉とに就て云ふのみ若し既に炊ぎたる飯米と煑たる牛肉とに就て之を云ふときは米は新に五六倍の水分を増して肉は更に其の容量を減ずるの故を以て米の滋養分を存するの割合は亦た更に甚しく肉に劣るものとなるべし。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

然れども此は但だ蛋白質の一點に就て言ふなるのみ彼の澱粉質及無機質の類は固より草類に多くして肉類に存すること少きが故に此一事に就て論ずるときは寧ろ草食するを可なりとす可し彼の蔬菜を食はざるが爲に壊血病を患ふるの例は古今少しとせず然るに人間はたゞ蛋白質によりて生くるを得ず亦た澱粉無機質の類のみを以てよく存するものにあらざるが故に草食に偏せず肉食に偏せずよく之を合用するを可なりとすること勿論なりと雖も米肉の中其孰れをか主食とすべしと云はゞ即ち米は到底肉の効能多きに及ばざる也。

法學士ベンタム曰く男子は婦人の自由權を奪わんと欲すとも蓋し得べからず婦人は既に此世界を主管總理する恰かも專制の君主の如し縱ひ婦人の用ゆる權は主として慈愛に由ると云へども其權は無限なり。

批評

○秋田婦人矯風雜誌

本文十六頁、青表紙、上に英國の女詩人ジーンインジエローの詩を掲ぐ、竹内楠三氏編輯發行人、田名部千代松氏印刷人、秋田婦人矯風會の器關となるもの也。社説二篇の外に、佐藤たか、堀見章、伊藤隆、大野さだ、錦綾女史、土居かめ等諸女史の論説あり、且つ太平山人の稿たる「眞個佳人」と題せる小説もあり、其他雜錄、雜報等略ぼ備わる、地方の婦人矯風會にして器關雜誌を發兌せらるゝや之を以て嚆矢となす、願くは健全なれ、いよ〳〵生長せよ、大ひに働らき玉へ、而して他の各婦人矯風會に於ても續々として如此き美擧に倣はるゝ類多からんことを。

○證詞の百合花　撫象堂主人

此は伊方亭主人と號し、實は西京同志社學院の神學校に學ばるゝ山本靜也氏の新作小説なり、其廣告によれば「趣向は哀れもの、主人公は少孃と父親、文章は言文一致、回數は十回、熱信ある少孃は頑固の未信者五人をして無限の生命に導びく、これが此小説の眼目」なるよし、拜讀するに、何如にも潔白なる趣向にして一點の汚れたることなく、讀去り讀來る所ろ恰かも基督教會祈禱會の感話にても聞く如く思はる、故に著者が理想は固より感佩すべきなれども此小説の短所も亦隨つて此長所に伴隨したり、即はち主人公と云はるゝ少孃も父親も其の何如なる人物なるやを知るに難く、決局一條の實事物語を承はるの心地し、到底小説とは思はれず。抑そも今の小説は作者が心中に一箇の大ひなる理想なきを以て紙面に現はるゝ所ろ亦た別段の意味もなし、即はち演説したりと云へば演説

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

したる丈け、泣きたりと云へば泣きし丈けにて、其餘に知らず〳〵感通すと云ふ一條の幽玄なる者などあるなし、故に高尚なる道德もしくは純正なる宗敎なんどを信ぜらるゝ人々が其の高潔なる志想を凝らして活人化せしめ、之を紙上に躍立せしめて一篇の小說とし、讀者が一笑一泣一喜一憂するのうちに端なく此の神線に接せしむるの工夫甚はだ大切なりと思はる。此の小說の作者の如きは即はち此に心掛られしものと思はれ、いよ〳〵其志ざしに感佩すと云へども、然れども祈と云ひ、歌と云ひ、斯迄に明瞭に斯迄に器械的に露白さるゝときに於ては、喩へば天の使に握手してチコロンで話する心地す、感ずる所ろ淡わしと云ふべし。特に其文章と云ひ、其廣告の躰裁に至る迄て、全然美妙齋一流の躰に摸倣せられたる尤も遺憾と思はる、著者もし其安んずる所を更に卓高にし、遠く塵界を望んで筆露を上より降らすの覺悟あらば、後來宗敎世界の小說家として大ひに現はるゝの日あらん。然りと云へども、此書紙數僅かに一百十八、前後九日にして脫稿したるものと聞けば、亦左樣に酷はだしく評すべきにもあらじ。

識者エドモンドボルク曰く一世を觀るに純清潔白にして一己の職分を盡す人あれども其公衆大同の利益となり邦國の福事を行なふに至りては家を愛する人に若かず蓋し最とも善く家を愛する人は最とも善く邦國の爲に有用の役を爲すと也。

○第三次演藝矯風會亡評　　波月子

波月子至て不粹者、演劇とては恥しながら見た事のない先生故此度演藝矯風會之演習に參りたるも田舍者が西洋料理を馳走になる感なき能はず批評などは、ト斷ても許されねば正直に有の儘をかくの如し。

那智瀧祈誓文覺三幕、これは演習の大眼目波月も大眼目を開て見たり趣向は百川依田先生の著にかゝる文覺勸進帳チヨボを少しくなほしたるとか申せども有の儘の處も多きようなり初幕渡邊屋敷月見の場渡邊亘と袈裟御前田舍者には立派に見ゆれども兎角愛情の乏しき感あり亘が座を立つ時後を見送る位は仕打に顯してよさそうに思はる况んや是れ一生の訣別ふたゝび相見んよすがなき場合に於てオヤさりとて時姫の三浦に於ける如きを願はざるなり虫の音に氣づかいながら花道より舞臺、舞臺より寢所迄始終無言にて忍び寄る盛遠、ギックリ白眼て氣張るような演劇的の動作を止めて實際を主とせらるゝ實に梨園の頭取歐洲に於てこれを見るを得べし、引かへし裏手の場亘の頭と思ひ込で袈裟の首級なるに驚き後へ倒るゝ處これも無言、サイレンス、イス、モーア、ザン、エロクエンス、云はぬは云ふにいやまさると申すべし、此の一幕はもし

骨子の勸進帳を一見せざる人には何が何やら解りがたし二幕目渡邊遠藤發心の塲渡邊亘此幕にてます〱嫌になれり妻の死を悲しむよりは醉て妻の首級を奪われたるを悔ゆるの樣子のみ遠藤盛遠を敵と知らば刀の束に手位ひはかけてもよかるべし怒る氣込のさらに見へぬは喜怒を色に顯わさぬ武士の習か盛遠のこれに反し身の非を悔ゆると共に袈裟を痛むの情十分に見えたり書置を讀む時手の震へる樣子聲の段々と曇る具合實際〱此の幕にて盛遠始めて口をきけり盛遠口を開きたる爲めか序幕無言の譯合が此の幕にて明々瞭々。勸進帳の塲文覺の容貌態度盛遠が出家せし者と思わる實は勇敢の暴法師組付く取手を捻じ倒し投ては讀み讀みては投げ烈しき立まわりあり破月子是を見て柔術を習ひ度しと思へり。遠くより白眼付て將棋倒しになり手もかけぬにトンボがへりする昔しのタテとは異るよし兵衛尉光能(左團次)との組うちになりてます〱賞歎せり此一幕あるか爲めに前二幕の淡泊なるを補ひ得たり凡そ演藝の事たる看客の想像を引起すの最も必要たるは言を俟たざるなり、當時小說家が讀者の想像則ち言外の意を知らしめんが爲めに‥‥或は――の如き者を用ひ故意に一文章の連續を絶つが如き事あり余輩は實際‥‥あるが爲めに果して讀者の想像を書外に走らし得可きか――あるが爲めに看客をして言外の意を知らしむるを得るかは保し難しと雖も讀み去て心靈なほ其處を去らず茫乎として自らを忘れしむる如きの感あらしむる文たらば蓋し千古の潔作なるか團洲の他優に勝る實に此處にあり彼れ動かざるに看客の想像は彼の動くを見彼言わざるに看客の耳底既に語あり、其の趣向は最も淡泊に其の事蹟は歷史的にかつ實際に近き無味ある(俗人に)此の原作をして花あり果あらしめし者は實に彼の力にあると云ふ可し、然れども文覺の縛に付てのちは疲れし爲か幕切の處精心拔けしようなり。市原野の一幕何の意味もなく從て破月何の評もなし保昌の笛を吹く時一指も動かさゞりしは不思議。猩々。鱗の性靈が可笑しみあり、猩々の輕妙なる云々とある記者は申されたが能嫌の破月氣早の拙者はたいくつせり最後の一幕は若き男女の盆踊りあのような事ありては新聞紙上に○○を付けての悪口を云われる小僧さんや娘達もあるべし矯風會何と云ふ名に免じてあのようなものは爾後廢止とせられ度し。何に致せ一の目を掩ひ耳を塞ぐ可きの不幸に落入らざりしは矯風會の矯風會たる實行を擧られたる事と感心し幷せて慶賀いたし置なり。

雜錄

○明治美術會起る

山下石翁

繪畫に於ける國粹保存の主義なか〳〵に跋扈し、日本の美術いよ〳〵高慢になりて天下に唯我れ尊としなど思ふに至り、眞美の神はもはや此の東端の美術國を棄てんとするにやなど思ひ煩らはるゝ折柄、時弊一轉し、今まや吾が同志の氣運將に大いに勃興せんとするの兆あり。即はち近頃ろ有名の西洋流畫家九十名發起人となりて、明治美術會と稱ふるを起さんとの計畫あり、其主意書なるものを草したるを見るに、云く、

美術は國と人世の感慨娯樂より起る者なれば其時代の思想に合ひ其社會の智識に適せざるべからず故に文明程度の進歩するに隨ひ社會百般の事業と相伴ふて變遷すべきは必然の理なり試に古來の美術を歷觀するに推古天皇の際には自から推古天平の美術あり鎌倉時代には自から鎌倉時代の美術あり室町時代には自から室町時代の美術あり元祿享保に元祿享保の美術あり文化文政に文化文政の美術周に周の美術あり秦漢に秦漢の美術あり唐宋元明に唐宋元明の美術あり十四世紀の美術は自から十四世紀の美術たり十九世紀の美術は自から十九世紀の美術たり文明國の美術は文明の思想を表し野蠻國の美術は野蠻の思想を表す要するに世故變遷文物の開け人智の進むに從ひ之に應するの美術其間に起るは理の當さに然るへき所にして亦爭ふへからさるの事實なりされば元祿享保に推古天平の美術を興さんと欲するも能はず文化文政に元祿享保の美術を興さんと欲するも能はす今の世に文化文政の美術を興さんと欲するも亦能はさるを明かなり必や今の世に應するの美術なかるへからす。

明治の聖代は推古天平の未開時代に非す明治の社會は元祿享保の鎖國社會に非す明治の思想は又古例墨守の舊思想に非す眼を洋籍に曝らし身に洋裝を纏ひ政治兵制工業文學百般の事業皆先を爭ふて法を歐米諸洲に取るの秋なり此時に當り美術のみ獨り世と背戾し舊法を守株し徒に復古を期せんと欲するも到底得へきに非す之を既往に鑑かみ之を萬國に徵するに必や今日の社會今日の思想に適するの美術無かるへからす本會は即ち此明治昭代の美術を振興するを以て目的となす者なり。

吾人謹んで之を祝し、切に其の志望の成就せんとを禱る。

○風采の美、繪畫の神

南石外史

人の顏に神相と云ものあり、之れ其の耳目鼻口の形ちにあらず、其面色の白き又は黑きにもあらず、喩へば金石の形而外に鏘然として鳴る所ろあり、白薔薇の艶なる花瓣の外に芳ばしき香ひあるに似たり、其存するや或は耳目鼻口の上に現はるゝ如く、亦た其の中間に介まるが如く、亦た其表に存するが如く、亦た其裏にかくるゝが如し。而して此の神相の麗なるあれば、彼の色の黑きをも美にし、又鼻の低きをも美にし、全く是れ容色の形ちの醜くきを變じて、玆に一種の靈顏を造る、而してその如此くなるは心理道念の高潔なるによる也。彼の義者が死に就くときは其顏ばせ燃ゆる如く、ステフハノが叩かるゝときは面て天の使の如く、キリスト山上に於て靈に接するときは其姿たかわれりと云ふ。故に道念高義の發表するところは其形ちや眞に高く眞に麗に眞に美なりと知るべし、之を切言すれば道德の形ちは即はち眞美なるもの也。左れば繪畫に於けるの美粹、所云る其神あるものは、一は亦た此に根せずんばあるべからず。

〇日月は飛ぶが如し

しのぶ

暮方の風すゞしく荻もなよやかにたわむ動くが如くに流る、水の面てを立ち割りて降り來る一艘の船ありけり、と見れば二八計りのあてやかなる乙女靜かに舷に居寄りてうつら〳〵と居眠るめり、東がしの山の端にちとの顏を見せたる月、西の空に黒く高く飛ぶ鳥、最と物靜かなる心地せり、娘は今ま如何なる夢をや結ぶらん、波なければ船も動かず、降るにまかすれば艘ぐべき煩らひもあらず、細虫水面に躍る、魚二三尾飛びはねて潑溂。

時に見る娘が頸に懸けたる珊瑚の飾り、何如にしけん其の一端より破れて粒々水底に落ち行くなり、魚は飛ぶ潑溂、珊瑚は落つポツリ〳〵、嗚呼や乙女起きよかし千金の寶物今や全く失せんとす、嗚呼や起よかし乙女千金の寶物、神通じてか彼女は忽焉として覺めたり、忽ち見て喫驚す、爲めに四五粒更らに轉々。

嗚呼眠りし間だに船は十町を下れり。下る間だに數十粒はすでに落ちたり、一と度び水に沒して見への外に入れば、珊瑚も亦た土灰に均しく悔るも反らず、而して今まや殘る所ろの數粒も將に全く脱落せんとす、覺めたるとき正に落ち行くの一粒を見る、アナヤ是れ心膓を割く最大の粒、アナヤ是れ失せたる數十粒を代表するの寶、而して更らに尚ほ失わんとする殘粒を變へしむるの前觸なり。

蓋し日月の經過する亦如此し、彼等は眠るうちに過ぎ行くなり、一と度び大悔して立つ、今日の一日三十年に代りて吾を責め、亦來るべき數十年に代りて吾を戒しむ。

暮色全く到る、天に一面の黒衣あり、水に數點の光りあり、秋風來る、荻さわぐ、月いとさびしく洩れかゝやぐ。

〇戀情を描くは難し

藤の屋

月の舍の主人曰へらく、ラブはよし戀はわるし卜。是れ頗るむづかしき言なれども若し我が卑近の文學をしらぶれば又理あるが如し。戀とて男女の間にかぎるものかは、隅田川に

ワキ「妻を忍び 女「子を尋ぬるも ワキ「思は全じ 女「戀路なれば

とあるにても知らる。されども大抵は俗情を寫して大にその神聖を汚すに似たり、例へば爲永本の如き妙は妙なれども俗情を專らとしたれば多くは卑猥に陷りて折角の感情を害するは悲しむべし。通情はよし俗情はよむべからずと芭蕉は戒しめて越人が「うらやまし思ひきる時猫の戀」と讀みたるを退けたりといふ。例へば次の二句を比較せよ

むし干に小袖着て見る女かな　冬文
蟲干の目にたつまくら二つ哉　文瀾

姿は全じなれど情は大に異ありて後者をよみし人の俗臆押し量らる。戀を描くハ例へば裸體像を作るが如く、戀それ自身は極めて神聖なれど寫法の如何に依りて或は人の感情を害するに到る。和歌及び漢詩ハいくらか俗氣をはなれたれども是れすら閨怨と云ひ或は閨をかこつなどハ面白からず。全じけれど李白が何時平ニ胡虜一良人休ニ遠征一の如き千代が「起て見つ寢て見つ蚊帳のひろき哉」の類は情深くして更に卑俚あらざるを覺ゆ。然るに我が俗曲小說を見るに戀をもて野合と全じ事となし讀者の感情を汚し、肌觸るゝトカ腹帯トカ嫌ふべき文字を列ぶるをもてよしと考ふるは風俗を亂す事少からざれば道德先生の爪はじきするも無理ならず。筆を操るもの宜敷謹しむべきとなり。

〇忙中閑を出す　ふ、ち、

沙漠の中にピラミッドを畫く、唯三角形たるを見るのみにして絶大の奇物たるを知るべからず、是に於てもし黑人と駱駝を副ゆればピラミッドの大初めて知らる。又海岸を畫かんに何如にして水の浩蕩たる浪の澎湃たるを知るべき、是に於て輪船も飛禽も必要となる。文を屬するも是と全じく、楠公の忠を書さんにハ直ちに其盡忠を寫すよりは寧ろ尊氏の奸惡を出して是を反照比較するに如かず。山岳の嶮を現ハさんには湖水の平らかなるを或は麋鹿の裕々自適を對するを可とす。又夕陽の景を寫すに日は山の端に入らんとし晩鴉森に噪がしく歸心矢の如き時落花の風なきにヒラ〳〵と散るを、或は隅田川堤上精神錯亂混雜して迷土の旅をいそぎ南無阿彌陀佛と唱ふる時金龍山の鐘靜かに初更を報ずるなど矢の如き歸心をして愈々矢の如くあらしめ錯亂混雜したる精神をして益々錯亂混雜せしむ。是れ古來より作者の慣用したるものにして忙中閑を出せば忙をして愈々忙たらしむるの妙あり。お染久松質屋の段に「今を限り暇乞佛前には親太郎兵衛看經の聲殊勝なり」とありてお染久松が焦心苦慮將に死なんとする百忙の中にユッタリとしたる看經の聲を出したるは作者が最も意を用ゐたる處なり。我れ思軒居士の譯「探偵ユーベル」を讀む、唯一の敬服したる句あり、

「此紛擾の聲激く起れる中に於て朗讀者は止むを得ず更に其聲を高くせりラッチール朗讀しをれりマアー之に一枚ヅヽ紙を渡しをれりゴーツ井ズ蠟燭を擧げてラッチールに傍へ

り蠟燭の蠟は滴々テーブルの上にしたゝれり」是れ紛擾の中に落付拂ひたる蠟燭のしたゝるを出せしは筆力最も非凡なるを見る。楠柯夢に半七自殺の回にお通を仙臺萩飯焚の塲に鶴千代を近くは京人形第八回に永代を出したる如き對照の最巧なるものにして作者要愼の深きを知るべし。

○日本の言語

八木彌二

日本の言語と題し、左る比ろ皇典講習所にて佐藤寛氏が演説せられたるを聞しに、論意面白きやうに覺へし節多し、故に左に大意を記るして編者の几下に寄す。

日本言語には一音一字のものあり、一音重複のものあり、一樣にあらずと雖とも外國語に比するときは正だしきものと云ふとも過言ではありますまい。現に日本の五十音抔と云ふ假名は、實に能く出來て居ります、第一(アイウエオ)の五字は未來語で、假令ばいかれまい抔と云ふ時に用ゆるもの、第二(カキクケコ)の五字は確定語にして、行く抔と判然云ふ時に用ゆるもの、第三(サシスセソ)の五字は命令語にして假令ば之れを爲せ何々をす可べしと云ふ時に用ひる、如此く皆能く出來て居りますから、一點の誤りは御座りません。之れに反して近來盛に行はるゝ英語の如きは、實に不完全なものでありまして英語やら何語やらサッパリわかりません、勿論之れは仕方のない事で、彼の英國アルフレッド王の時代に、國大に衰へ、人民饑饉に迫ると云ふ有樣にて、海陸共に充分の軍備がなかりし爲め、隣國與て英國に亂入し、土人を殺し其妻女を奪ひ、我が妻とするもあれば妾とするもあり、政權を殺ぎ、王位を輕んじ、前後五十余年の間、スコットランド人、アイランド人、デンマーク人、ノールウエー人、及びギリシヤ、ローマの各人種が、思ひ〳〵に住居せしと故、國語と云ふは十中の一にして、他は皆外方の語が交ぜつて居ると云ふ譯故、語法も從て定まらざるは勢ひ止むを得ざる次第でした。併し其の後、イリサベス女王の時代に至り、或る大學者が出まして、國語の亂れたるを深く憂ひ千辛萬苦の思ひをなし、彼の語を採りて之を補ひ、國語一躰の語法としたるに、世人之を用ひ、結局今日行はるゝ英語で御座ります。是れ即ち折衷語にして眞の英語と云ふに非らず、又ローマ語と云ふでもなく、實に不完全なるものであります。之れ等は獨り英國に止まらず、又各外國共に多少折衷語なる事は明白であります。」獨り我國の如きは然らず、皇統一系の政にして、外國に比類なく、殊に日本國は海陸を隔て維新前迄は別に交際した國もなく、獨立獨孤でありたれば、國語の亂るゝ謂はれなし、然るに近來各國と交際する樣になりて、日本語になき處の電信、鉄道抔と云ふ言葉が、出來ました、是等は國の進步にて實に宜敷事なれども、日本語の杖を以てステッキと云ひ、書物を以てブックと云ふ如く、一つ品が二つ或は三つの名を持て居ると云ふ樣な煩はしき語が出來たから、是等は一方にして貰ひたひ、併し是等を以て國法の分らなくなると云ふ樣な亦は萬々御座ひません、堀秀也と云ふ人が著したる、日本語學傳と云ふを見ても明かなもので御座ひます。然るに先頃、井上圓了氏が國民の教育と云ふ雜誌をだされました其の文中に曰く。日本語學の單數複數の別なく、人が死んだ馬が斃れた云々」是等は一人一頭なるや判然せず、又男性女性の別なく且つ未來の語を現在に用ひ怪まざるは不完全と云ふ可し云々とありましたが之も御尤もの樣なれども私しは井上氏は日本語學を知られぬ人と思ひます、成程外國語の如く語尾にsを附して複數にすると云ふ樣ふな譯けにはなりませんが、此の單數複數を書き分けるには、彼、彼等、汝、汝等、私、私共と云如く書きたならば分明にして差支なかるべし、又男性女性の區別は入らぬ事と考へます、一體外國にて男性女性を區別するに、強きものは男性女性弱きものは女性と云ふ如くなりてをりますか、是等は甚だをかしい事が出來ましよう、外國語にて犬は強ひから男性猫は柔弱なれば女性なりと云ひますが、男猫に向て女性とはチイトをかしひではありませんか、故に男性女性抔とは別にせずも差支ひない樣に考へられます、未來の語を現在に用ひ明日上ります、今晩伺ひます抔と云ふ聲が御座りましようが、少し心ある人はそんな事は申しませんで、明日上りましやう、今晩伺ひましやうと申すであり升、然るを井上氏は野鄙なる土地の婦女子の云ふ一部分の誤りの言語を以て、雜誌に登録し、普く國中に弘ろめ、夫れのみに止まらず雜誌の事なれば外國人も見るべく、外國へも渡る可く、然る上は外國人らが之れを見て何んと評しましようか、必ず日本語學は不完全なり不規則なり自國人が批難するを見ても不完全なるを稱するに足るべしと云ふべし、是れ等を考ふれば井上氏は日本國に對して不忠人と云はなければなりません、一體私しは日本語學熱心にして、國語國文而已を用ひて貰ひ度ひが希望であります。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

一、二、三、

ドッコイ

二、二、三、

○にくからぬ花は實盛

八まん大名、花ずきをなされけるが路次にて手塚大郎介といふ侍を御駕ちかく召れ、あのみせ店のせき臺なるはさつきさうなが、黒い花はいまが見初めじや、あたいゝかほどにてもとらせ買て來れと仰付らる、かの侍やがてはしりゆき、此花は直段いかほどゝとふ、亭主金子二十兩に差上ませうといふ侍きいていかに世に稀な花じやといふてもあまり高直なり、十兩に仕れといふ、亭主いかにも御意の上はまけて上ませうといふ、侍やがて金子をわたし、此花の名は何といふぞ、亭主其札を御覧じませ實盛と申ますといふ、さて花をもたせ歸り御庭前の日がれぬ詠めとなり、朝夕水などそゝがせ愛せられしが、そろ〳〵と花の色しろくなる、これは不審なるとかなとおぼしめし花壇奉行の樋口二郎八といふ者をめされ、樣子を御たづね有ければ、樋口はたゞ一目見て、言語道斷にくき儀を仕ました、元來これは墨で染ました物でござりますと申す、太郎介近頃不念なり、さう〳〵あたいを取歸へし來れとある、太郎介其まゝ植木屋へゆき、やいそこな大かたりめ、白い花を墨にて染ていつはる段不届千万なり急度金子十兩もどせといふ、亭主きいてされば其の墨で染ましたゆへ花の名をさねもりとは申ます、實盛の謠に鬢髭を墨に染とござる儀は御存でござらふ、私無下にかたりは仕らぬといへば、太郎介うちうなづき、しからばぜひもなしさりながら實盛のうたひに、近年でりやうに付られてとあるからは、五兩もどせとりくつ詰にして五兩取かへした。

○初茶湯の風流

時津風枝をならさぬ門の松、たちかへる春の初空、みどりの竹のひとふしを、常盤の友と愛し、玉川の風流をたのしふ人ありけり、初茶の湯をもよほし、爐路の飛石みぎりをはらひ手水鉢の若水きよらかにして、同志をまねきしに、をの〳〵待合にしてあがりより數寄屋に入、先水仙のなびきより掛物

其ほか、飾のしほらしきに氣をつけ、あらたまのとぶき會席も過ければ、亭主やがて爐のもとにより、客にあいさつしてさて茶入の蓋をとる、折ふし天井にて鼠あれければ、亭主心得其まゝ茶入の蓋をする、客衆これはお氣のつきたる儀、すこしのほこりをもいとはせらるゝ御心ばせ、中〳〵今日の茶の湯はなどゝほめければ、亭主いやはやといふて自慢くさく十面し、しばしありてたつる、さて茶碗をいるゝとき、又天井にてねづみあれければ、亭主あはてゝすべきやうなく、其まゝ茶杓をすて鼻をつまんでにやんといふた。

○後家は小町が俤

丙午の女は夫を喰ふと昔から云傳ふ、こゝに夫を四十九人まで見はて、それより後家を立て九十六にありしおばゝ有しが、さるひと、そもじをよき所へよめいらふほどにちうとみせてくれいといはるゝといふ、おばゝ聞てもはや後家でくらさうと思へども、心れはたちの時も今もかはるとれないほどに、だんがう次第にしませうが、さきはどのやうあ所でござる繼子はござらぬかといふ、きもいり向は面打じやがそもじをすこしの間やとふて小町の面の本にしたいといはるゝといへばおばゝあきれて腹をたて九十六になる者が小町の面の本によくば、百錢をめされいといふた。

兒藍

○乙女阿利斯（五）　　波月子

アリスは近付く人聲に再び森のうちへ隱れました、母上は敵にまさしく捕へられ賜ひしか貧家の我が家に何の獲物もなかるべきに先き程タイガーの峠にて一人の婦人の云し事もし眞事にてあらんにはこのあたりに居たまふべきに樣子を詳しく聞かんにはかく心配もあるまじものをといろ〳〵に工夫を廻し居るうち人聲はます〳〵近くなりました。アリスは森のうちよりすかし見れば不思議デス一人の婦人が一人の獵師といろ〳〵の物語をして來かゝりマシタ、眼を定めてよく見れば先刻峠で遇た婦人デスかの獵師は帽子を深く被て居れば何人ともわかりません、盜人共が焚て居る火影をキット見やりましたがかの婦人をいそがわしく傍の森におしかくしヅカ〳〵と進み出てました。こなたの盜人共はガンパーがドーシタ首尾能取て來たか　ムーと云たまゝ火の傍へよりましたが帽子を取りません　可笑しな奴ヂヤーチーがドーしたと云ふノダ帽子を取らチーて　ガンパー紅玉は手に入たか巡邏卒は

多人数ダッタカ　イーヤと返事をしながら帽子を取た顔を見ればまがふ方おきヨダナです驚く盜人呼子を取て吹立つれば四方より凡ソ十七八人許りの盜人が走せ集まりましたヨダナを中に鎖込めて手に〳〵扱連れ砍てかゝりマシタが事ともせずに戰ひました遙か彼方の森の茂みには先前の婦人が氣づかわしそうに立て居ります傍らにまた一人の女薄暗ければたしかにそれとは分りませんが母上にてはおいさぬかと思ば猶豫しませんット走り出でゝ近き見ればまがふ方なき母縛めのなわは一人の婦人が解て呉れましたが病みたる上にいろいろの辛き目に遇たる事故息も絶げデス抱き上て介抱し心付て懷ろの藥をとりいだしよう〳〵にして飲ませマシタ。母の介抱にコヾナと敵の戰には少しも氣か付かぬアリス。母は指さして恩人の命を救へアリス行て見よ御前も見れば腰に刀もありピストルも持てゝはないか私は此の方に願ふから私に心配せずと早く　恩人とは何誰デス　アレあすこに戰て居らっしやる方　と指ざし示すに心付き腰に付たる袋を取り去りあなた願ひます　大膽にも賊の方へと走り行きました。此時賊の七八人はコヾナの爲めに斬殺され殘りの者も敵し得ず勢盡て逃げんとする樣子を伺ふデジニーは腰よりピストルを取出だし覘を固めて打たんとする後ろにまわりし乙女アリス同じくデジニーの頭を覘て彼の時遲く此の時早しドーと一發デジニーの倒るゝ處をのしかゝり刀を持て力まかせに斬り付ました、ヨダナは烈しく戰て四五人を打殪すの外盡く斬殺しマシタ。ヨダナはキード川にて打たれたノデなくデジニーはヨダナと手下のガンパーを見過て殺したノデス。アリスがキード川で遇た獵師はガンパーでかの袋こそ眞事の紅玉ヨダナが奪ひ取たのは贋物デシタ。ガンパーは此頃デジニーの不情不慈なるを怒てひそかに彼紅玉を盜み取り出奔せんと企だて居る所ヨダナが政府の位高き官員と云ふ事を知り追かけ行て紅玉を與へ賞與を得んとのたくみデシタ。コヾナは贋物と知りません身を逃れてかの紅玉を取出し見れば通常の石デス殘念デ堪りません引かへして奪ひ取らんにキード川は渡れませんからタイガーの山越へをする途中デ遇たノはかの婦人デス麓の百姓屋に居る。案内を頼んで來て見れば盜人共が居りマスカラ戰をはじめタノデス。アリスの母は何故に捕へられたかト申せばヨダナの介抱した事は知りません多分ヨダナは眞の紅玉を持出して百姓家へかくしたかも知れぬと云ふ疑がありマシタ故デス。このような事を語合うち夜はほの〴〵と明ま

したアッスはガンバーが後悔して渡しました紅玉をヨダナに送り母の介抱されし恩を謝しましたがのちに御門の叡聞に達して都に母を安樂にやしなふの幸を賜はりマシタかの百姓家の婦人にも賞金があつたそうデスイロ／＼入組で居る物語りデスが長くなりますからかいつまんデ書くの通り。（完）

史傳

○ブルータス及其賢妻（中）

ブルータスが妻ポルシアと云へるは、前に記るしたる如く哲學者カトーの愛娘あり、其從兄なる此のブルータスに嫁してより伉儷の交らい最と高く清し、平生極めて温たかなる愛情に切なれども、亦深く思慮して輕々しく立働かざるの心得あり。左ればブルータスが心中の憂苦は先づ第一に此の愛妻に感悟せられつれど、ポルシアは決して早率に之を問はず、朝夕良人の居動に心づけして扨ていよ／＼尋常ならぬとありと思ひ得たれど、良人は決して徒らに物を隱し玉ふの人にあらず、若し其の隱し玉ふときは之れ容易すく問ひ參らすべきものにあらずと信じ、深沈熟慮、或る時其の部屋に入りぬ。ポルシア則はち密かに懐劔を取り出し、股を衣の上よりつんざきたり、鮮血淋漓、侍女あわてふためく、ブルータス愕ろきて走り寄り之を抱けば、ポルシアにこやかに云へり、

ブルータスよ、郎君すでにカトーの娘を娶り玉ふからは、彼女をたゞ君が侍女と爲し玉はんとにあらじ、之を君が吉凶の同伴者となし玉はんとの爲めならん・・妾は郎君に嫁してより一つだに怨むべきとあらず、吾等が婚姻せしを悔ゆべきこと些さかも候はず、左れど妾はにして若し君が尤も密やかなる苦痛尤も密やかなる御かたらひに預かり得ざらんにハ、郎君如何にして妾が最上の信愛を悟り玉はんや、素とより女性は物を秘するの德に弱はく、國家の大事に參らふべき覺悟候うまじ、然れど若し有德なる敎育を受け、與れる交はりを受るときは、女性天賦の弱質も亦た大ひに強くなり候ぞよ、斯て妾はゝ今まカトーの娘めたり、ブルータスの妻たるに恥ぢずと誇り得候ものゝ、自から試みでは己が覺悟の如何なるやを知りがたしとて、則はち深く傷つけ忍耐の程をためし候、

云ひつゝ其の重傷を示したりける、嗚呼ブルータスにして此の夫人あるか、否な此の夫人ありて能くブルータスはブルータスの事を成したるなり。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

扨ても其日となりぬ、ポルシアは家に在つて煩悶苦吟す、左れどブルータスは同志者と共に遂に其本望を達したり。斯てのち、演壇に登りて騒ぎ立つ人民に向ひ、あゝ諸君のうち果して余の如くシーザルを愛せるの人ありや、彼れ余を愛せしが故に余は之が爲に泣きたり、彼れ多福なりしが故に余は之が爲に祝したり、彼れ勇猛なりしが故に余は之が爲に賛美したり、然れども彼遂に非望を懐きたるが故に余は則ち之を殺ろしたる也と、聞くもの歡呼して喝采したり、然れど彼の奸雄アントニー密かに民心を動かし、又たシーザルが從子オクタビアス他郷より歸るに及びて、人民大に騒ぎ起り、ブルータス同志の人々に反對したり。

此に於てブルータスも亦た止を得ず羅馬を去りたり、去ると幾干ならず彼の辨士シスロがオクタビアスに歸したるを聞き之に書を送りて云く、

今后余は何如になすべき乎之を知らず、戰わんか和らがんか固より之を知らず、然れども只一事の斷乎として決して動かざるものあり、即ち余は決して奴隷とならず。

蓋しブルータスはシスロが内亂を恐れてオクタビアスに歸し國家一時の安寧の爲に百年の自由を曲ぐるとを敢てせしを奇しみ、之を許して云く、シスロはアントニーの暴虐を防がんとしてオクタビアスに從ひたり、然れども之れ亦た彼に於て新らしき暴虐を打立てしむるもの也、又云くシスロは暴虐なる暴君を除きて容易なる奴隷と爲るとを甘んず、然れども余輩の先祖は凡そ如何なる温和なる主人にも屈服する能わず、天の自由を得ずんば之を何如んせんやと。ブルータスが志想凡そ如此し、左れば此の思想を以て今や壓制の襲ひ來らんとする羅馬をば、只暫らく逃れ出でたるなり。

ポルシアは羅馬に留まるとゝなれり、義士賢妻未だ別辭を多言せず、滿胸の情すでに眼こに滴たるめれ、ブルータス既に劍を執つて出んとすポルシア之を送る、時に傍らに人ありてポープが詩ヘクトル、アンドロマケ留別の句を吟ず、其辭極めて凄々、

わがヘクトルなほ生きてあらん限り、妾わが父、妾わが母、
妾わが同胞は皆な君の一身に集まりて見ゆ……

ブルータス微笑して云く、然り、然れどブルータスがポルシアに答ふる所ろは、ヘクトルがアンドロマケに答ふるに異なる、言ひ畢り節を合せて低吟す、

わが妻よ君がホームの業を取れ、其處にて糸とり紡ぎ玉へ

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

義士すでに發す、前程悠々、賢妻家に留まる。

小說

○酒鬼 （其六） 腑甜主人

東が白むと諸共に雨戸の音滑板の響、門々で聞ゆる「お早ふ」の聲を相方に日はいつか出でにけり。第一に目の覺しは久保村、あくびをしながら眼をこすり暫らくは天井をながめしが思ひ出した樣に起上て呻をして又あくび二ッ三ッ。睡さふに瞬をして何が目當か天井を見詰てぼんやりとしたり。山澤作次は快さゝふに今頃は大方歡樂鄕に遊んで酒の泉に浴して居るかも知れぬ。遽かに苦しさふに魘はれた、或は法事の蠟燭に燒死ぬ夢でも見るか――もし眞心があるならば。

「オイ‥起きねェか」是でもサスガ朋友の情、魘さるゝを見て荐りに搖ぶる「山澤‥‥起きねェか」

「ウ、‥‥‥ウ‥‥‥ウ‥‥‥」

「ウ、ジャアねェ‥‥起ろッて云ふに、オイ‥‥山澤」

「ウ、起るよ‥‥モウ何時だ」

「何時だ‥‥さふすモウ七時だらう」

「七時‥‥‥」

山澤はムックと起て細やかに眼を明き暫しはまばたき、口がさける計りのあくび、

「モウ役所はおそいナァ」

「役所、フヽム馬鹿な、家が燒けたジャねェか」

「燒けたッて、休むと日給が取れチェ」

「日給、くそッ一日ぐれェけち〳〵するなェ。今日はお惠み金で一杯呑めるぞ」

「お惠み金‥‥ダが家ジャどうしたらうナァ」

「よく家ッて云ふ奴だ、そんなに嚊ァの面が見てェか、マァ午まで御輿を据ろ、朝はおれが驕らァ」

「お前が‥‥まだ金を持てるか」

「其方ジャあるめェし、いつでも福々だ」

「いつでも‥‥フヽム」妙な笑方をして起上り「井戸は何處だ‥‥顏でも洗つて來やう、お前は顏を洗つたノカ」

「おれか‥‥ウン一所に行かふ」

諸共に出掛けしが暫したつて共に歸れり。久保村は一升樽を作次は竹の皮包を手拭にくるみて笑るにあらねど酒の香に早や醉心地、面色も赤味を帶びたるは試酒にコップ一杯を傾けたるなるべし。

「久保村、よつぽど燒けたさふダナア」 それでも心配の氣色は何處とおく言葉に顯はれる。久保村は嘲けるやふな口吻で「また初まつた……愚痴ッぽい男だ」

「ダガチ……おふくろが」 間は人情、まだ可愛らしい――奇特な心が酒の濁の底に殘つて居ると見へる。

「プッ……」 不人情な久保村は吹出したが直と口をしめて冷笑の眼を向けて「どふした――おふくろが、燒死でもシヤアしめゝし……」

「ダガチ……妙な夢を見たんダ」 調子は段々に沈み勝。

「夢……ハヽヽヽ……舊弊な事を云ふナエ」

「ダガチよつぽど妙さ、マアけなさずに、實はかふなんだ、おれが親父の位牌を拜んで居るとおふくろが傍で頻りに泣て居るんだ、それからどうしたんダッテ聞くとおれの顏を見て赫とにらんで口から火を吐たんダ」

「フム面白え、器用な細工をするもんだ」

「マアだまつて聞きねエ、すると其火がおれの衣物に移つてパット燃出した、サア口はきけねエし身體は燒けるし、苦しさはなかつた」

「それで呻つたのか、ハヽヽヽヽ」

「ダがどうも氣になつていけねエヨ」

「氣になつて‥‥大われエぞ、氣になる樣な風でもねエぜ、マア一杯呑め‥‥」

頓てまた獻酬が——此社會では人間最大の歡樂と考らるゝ酒盛が初まれり、中山の酒能く劉玄石を醉はしめしが千日の後には是も醒しに山澤作次は殆んど四十年の長い間七ツ八ツの時から飮はじめ白毛交りの髯ムシヤクシヤとなるまで樽柿の臭をさせざるはなく、苦しむにつけ樂しむにつけ年が年中酒びたり、地黃坊樽次の古を慕ふて水鳥記に名を殘さんず欲する困り者。年來の酒毒が回つても碌な事もあるまいに、此頃は肥りしとて人毎に誇るとか聞く。デモ親は親、人情はまた格別にて仕合に悴は丈夫と母は喜ぶ、それほどの恩を‥‥忘れしにもあらぬと見へて夢を氣にするはまだしほらしひ。

「おれはモウ歸らふ」、茶碗を措て作次が沈んだ調子。

「歸る‥待ちねエ、午まで居ろッて云ふに」

「どふも氣になつて‥‥」

「勝手にしろ‥‥意苦地の無へ野郎だ」擲りつけた樣な調子て茶碗酒グッド一ト息。作次は怨めしさふに、

「意氣地が無へッて人情だアな」

「人情‥‥フ、ムわらわせやがらア‥‥」

人情——此二字は作次が異見される時の詞だが作次とて人情を知らぬものかは。酒と云ふ惡魔が此世になくバ佛作次と云はるゝ善人。常日頃氣立の惡しきにあらねど咽三寸が子よりも可愛ひか親よりも大事か一錢が二錢でも巾着の底をたゝくまでも舌打して妻や母の嘆も新内淨瑠璃を聞くほどにも思はず、近所の貰ひ泣を見れば血ばしり眼で大聲あげて罵る。それでも醒た時は——醉はぬ折は「ア、惡かつた」と氣の附ぬでもなく「お母さん明日からは禁酒しますぞ」と口の下から「お名殘にタッタ一杯」と子供の樣なねだり言、禁酒と云ふが嬉しさにジャア是ッ切りダヨと許せば一杯一杯また一杯と限のなき飮明しお心よしと名ある相貌も舌なめずりするその强らしさ。よしや常はお人よしでも二十四孝に上戶はなしといふものを。

「けちな野郎だ、夢が氣になるッて‥‥阿魔ッちよの言草ヂヤアあるめへし」 惡々しひ久保村の詞。妙な癇癖もあるもんで「けちな野郎」と曰はれてムッとした顏付。

「ウム一杯吳れろ、くそやけダ‥‥」

「ハ、、、辛抱が出來めエ、否だなんぞとすねては見たが

アゝと來ちやたまらねエからナア」　久保村の機嫌顏。貧乏德利を振て見て首かしげ「ぐず〳〵云いながらモウ飲んで仕舞つたぜ、有りやしねエぞ」

「あァんだ無へのか、馬鹿々々しいモウ一升購れチエか」

折から溝板の音バタ〳〵、合長屋のものと覺しく金切聲で、

「オイ長さんのおかみさん、ゆんべの火事チ、婆さんが一人おつちんだトサ」

南無三、作次の顏色は又變つて與る。久保村は苦笑、德利を片手に「待つておれが買て與らア」

行違に戶をガラリ開けたるは娘お時、「お……お父さん」

「ヤツどうしたんダ」さすがに驚いた樣子、

「どうしたツて、ゆ……ゆうべッから」息は絕々に眼はうるめり、「早くお……お邸へ」

「お邸へ、何かあつたのか」氣遣しさふな尋ね方。

「何がッて」、娘はうるみ聲「お祖母さんが死んだよ」

「エッ……」作次は起上る、ヨロ〳〵と戶につかまり出るはため息。

世態十年看爛熟。家山萬里夢依稀。
躬耕本是英豪事。老死南陽未必非。

開書

○矢田部良吉君に與ふるの書　井上二郎

去る十九日君が高等女學校に於て演說せられたるものゝ筆記を一讀するに、左の如き句あり

國の基は御承知の通り當校の職員が關係して居るには相違なけれども是れは本人一個人の話にて學校の關係せしものにあらずされば能勢氏の論文も能勢氏自から出したるものにて私なぞは固より一讀もせざりしが幾分か世間にて彼れ是れと噂さすれば一讀いたしたるが該文は迚も道理に叶ふものにあらず。

生が承はる所ろによれば矢田部君は初め國の基の主筆として世に廣告せられたるには候はずや、而して國の基の第一論說をして立派に掲載したるものに對しては如此く御言わけあり、又君は高等女學校の校長にあらずや而して能勢君が同校の教頭として諸生に向ひ演說せられたるものに對し斯の如く冷淡に看過し諸生の理想をして何如やうに成行かしむるとも心配なき如し抑そも國の基と高等女學校とは固より何の關係もあるまじき筈なり左れど高等女學校に於て其教頭が演說したる論旨が之を國の基に掲載したるの故を以て乍まち同校と無關係となるとは何如なる理由に候ぞ、生聞く英雄は難にあたり衆厄を代り擔ふと、足下の如き豪傑は何卒人に誹謗を讓らざるやう御心がけありたしと存じ候、不一

○野勢榮君に呈するの書　山下剛

生は深く先生に服し其の卓拔奇矯にして物事に拘泥せざるの氣象を慕ふ聞く故森大臣は甚はだ先生を愛したりと世人之を分らざるとのやうに言なせども生は竊かに其由縁を知れり渡し森氏の如き奇矯雄剛の人にして初めて先生を用ゆるに足るとき存じ候先生嘗て九州にあり熱心に基督教を信ず當時其書生を率ひて佛寺に亂入しステツキを以て佛像を叩き倒し靴を以て之を踏みにじられしとあり又嘗て奧羽にあり此時深く基督教を嫌らひ生が友人等が其地に傳道したる際學生の方を盡して之を妨害せられたるとあり先生の約束定まりなしと云へども其變ずるや雷電の如し眞に男らしく雄壯なり故に生は夙に先生の言論行爲に服せずして只だ先生の奇矯卓拔物事に拘泥せざるに服す、今まや先生萬評に當りて紛々忽爲非難させられて爾ほ堂々たり、生頗よ先生を愛し且つ先生の爲に許こぶ、何んとなれば先生は素さ老婆の如き情切と注意とを要する女學校に適するの人にあらず亦官立校を理し文明的の完全なる教育を施すに適する人物にもあらざれば也、故に其高等女學校の教頭幹事を止められたるは頗ぶるよし此上最早森大臣なきの文部省を見捨てられんには更に尤もよし而して先生の爲に計るに彼の鬱々蒼々として奇岩巨谷に富める木曾の山中か又は壯士浪人の多き金澤大坂九州邊に隱れ純然たる昔し風の塾舍を設け能く同志の書生を集めて之を訓練せらるゝを最可さす、是れ先生に尤も能く適する所ろにして亦故大臣の遺志に適ふ尤も切なるべし、今の世は殿方才子風にあらずんば都門に適す可らず先生斷然官海を遁てゝ可也、平素深く高風に同情あり故に謹んで愚言を呈すと云ふ敬白。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○郭公の啼くにつけても有るに甲斐なき身の打ちなげかれて……人のもとへ　蘆野明日香
郭公世をうの花の咲くころは我もしのひの音にそ鳴るゝ　同
郭公おのか五月さ打ちさけてなく聲きけば我身なからも　同

○懸寓
待つ人の心も知らすほさゝぎすねたしや雲の餘所に鳴くなり　湯谷磋一郎

○更衣
吾妹子か縫にておくれる夏衣はるを忘てきつるけふ哉　同
けさかへし單衣はうすけれとあかきは花の思ひ成けり　同

時事

○一夫一婦制建白

東京婦人矯風會南部踏氏の發起により、一夫一婦制の刑法及民法に對する建白書は、去廿七日湯淺はつ子等の手により元老院に呈出されたり、之に署名連印したるもの凡そ八百餘名、著名の士女頗ぶる多し、吾人が傳聞する所ろによれば、管了法、植木枝盛、加藤弘之氏夫人、星亨氏夫人、飯島魁、和田垣謙三氏夫人、山東直砥、渡邊有香、津田仙、島田三郎氏夫人、梶クラ、ホイトチー、植村正久、小崎弘道、井深梶之助、大儀見元一郎、小方仙之助、田村直臣、矢島かぢ、潮井さく、岩橋靜江女、藤田救郎、金谷照、服部章三、荻野ぎん、草間時福母、河村豐洲妻、呉くみ、等諸氏の名其初葉に存するよし也、而して此は固より基督教と關係なきものにして、信徒中署名せざるものあり、未信徒中尤も熱心なるものあり、此他に尚ほ續々として申込ありと聞けども、其は既に期日に後れたるにより不得止之を第二回請願者の方に廻はすことせられたる由也。而して府下に於ては早くも其第二回建白者たらんとするもの之れあり、地方に於ては神戸大坂西京等より既に踵を接して起り立ちしものある外に、尚ほ、札幌、函館、高知、千葉等より續々建白書呈出に合同するもの夥しと聞く。

○能勢榮君を送る

六月十九日高等女學校教頭幹事兼教諭能勢榮君非職仰せ付らる、吾人先づ女學の爲に之を祝し次に能勢君の爲に之を賀す。蓋し能勢君は奇矯卓犖の士なり、北背行往々にして謹密なる女學界に適せざるものあるが故に、君が圖の害ひは背ふが如く能く雜誌世界の恐慌とならずして、反つて君が奉職する所の女學校は天下大恐慌の主因となれり、且や吾人竊に君が女子教育論を讀みて太たく君に反對す、故に君が此の非職を仰付られたるを聞く豈に女學の爲に大ひに祝する所あらざる可けんや。然りと雖ども君素と凡士にあらず、其脱俗果行の勇は將に大に用ゆるの地あらんとす、但だ夫れ君が尤も適するの戰塲は決して官立女學の界にあらざるを知る也、而して君すでに之を去り、今や翩然將に他界に雄飛せんとす、吾人豈に君が有爲斷强の才に向つて賀する所ろあらざる可けんや。尙わくは努けよ。

○疑惑を蒙りたる理由相分る

右能勢榮君は去二十三日付の書狀を、數種の新聞紙に寄せて云く、

拜啓高等女學校の風說も漸く鎭靜し先々安心致し候扨過ぐる一二週間の世評は頗る烈しく就中小生の人物は如何にも不品行なる樣に言ひ囃され甚だ迷惑致し候小生は去る明治九年秋より十餘年間一日も絕す教育に從事致し居り是迄品行方正なりと人にも言はれ自分も信じ居り候處今年今月に至り突然不品行の事もありりと評せられ隨の字の形容詞を賜はり驚き入り候若しや眞に不品行の事もありはせぬかと日々我身を三省致し候得共何も不品行致し候覺え無之候左れば全く自分の不德なるより人に斯く言はれたりと存じ一言も辨明致さず居り候處此頃東京日日新聞社說(高等女學校を如何)を一讀致し一一敬服致し小生が世の疑惑を蒙りたる理由相分り申し候就ては謹んで關君の教を奉じ以來我身の仇となる說切は斷然相止め申すべく候。乍然國のもとゐ第三號に揭げたる論說は未完の者に候得ば前號の續きを來月一日發兌の國のもとゐ第四號へ載せ申すべく故に全篇御通讀の上御評論被下度敬具

能勢君よく、斯ては亦た間違ひ候ぞ、何條君が武骨なる深切が君に仇を爲すとの候わんや、君もし去月廿五日以來の女學雜誌が、前後一徹の辨解を爲すの傍ら亦前後同一の非難を呈する所ろよ御注意あらば、君亦釋然として睽解さるゝ所ろあらん敬白。

○此一事明瞭、彼一事曖昧

東京高等女學校に關する風聞の喧雜なるや、吾人少さか自信する所を白し敢て之よ驚ろかざりき、何んとなれば其誤報の出る所ろ明白にして頗ぶる解釋し易かりしが故也、而して今や世論鎭定し果して吾人が先きに辨論したるの元因に出しとせらる。然りと云へども、此の風評の盛なるとき、飛火四散、乍まち府下惣ての基督教女學校、及基督教信徒にして女學に關係する者の一身に惡風評襲い來りしの一事は、吾人頗ぶる其の出所の曖昧なるに惑い、密かに嗟歎して眞理の掩はれざるを疑ひとしたり。見よ基督教的女學校に欠點あるは固より少なからじ、然れども惣べての基督教女學校が、惣べての無宗教女學校に劣り、どれくも必らず如此き淫猥なる不品行ありしとするは事理に於て承知しがたきことにあらずや、然るに彼の築地に於ては十三番女學校四十二番女學校の如き、又は麻布に於ける東洋英和女學校及香蘭女學校の如き、又は青山に於ける英和女學校の如き、又は麴町區に於ける櫻井女學校及び明治女學校の如きに至る迄で平素少さか教育界に名ある惣べての基督教的女學校は悉とく惡名を蒙むり其他平日に於ては常に如何がわしき風聞ある二三の女學校の如きは此際に於て特にソヨとの評をも蒙らざり

しと云ふと、頗ぶる奇しむべきにあらずや。

○或は云く佛者賄賂を送りたりと世上に交際を絕ち、專ぱら隣々の論評を爲すを以て任じ、未だ何れの宗教家とも ならざる人を以て編輯せらるゝ時務評論は、去二十一日發兌の其第二十六號に於て、「佛教徒及新聞記者の不德義」と題する論說中に、左の如く慷慨せり、

之を聞く佛教徒中に於て一の政黨類似の團結を組織し居る俗侶あり此機に乘じて耶蘇教徒を陷れんとて二三の新聞記者に賄賂せりと、吾人が始めて之を耳にするや容易に信ぜざりき然るに此頃の諸新聞を見れば何れも耶蘇教徒を誹謗し耶蘇教徒を從兄妹にても叔姪にても師弟にても一個の男子と一個の女子と關係あれば必らず此に醜行あるものゝ如く野蠻時代の小說家の想像にもなかるべき不德義の事實を捏成して之を傷害し之を擠陷するもの滔々皆是也吾人は耶蘇教徒に非すと雖ども斯の如き不德義の舉動を見ては實に慨慨に堪へず……誰か之を信ぜんや唯か之を信ぜんやとは言ふものゝ此頃二三の新聞紙に揭ぐる如き事實及び如此き浮薄なる文字は賄賂を受くる如き人にあらざれば迚も出來ざる文字なり政黨に類似したる團結を組織するが如き私利的の舉動は賄賂を贈る如き人に非ざれば迚も出來ざる舉動なり……或は云く諸新聞の記者悉く賄賂を受けたるに非ず二三の宗教に淡泊にして私慾に鋭敏なる新聞記者が之を受けて其雜錄を讒誣の一方に向けしが國粹保存主義の新聞記者及び輕躁事を好む新聞記者は賄賂を受けざれども此の如き舉動を面白き事に思ひ一同に唱和したるならんと蓋し然らん我未だ証據を得ざる也。

此亦無証據の評論なりと云へば吾人は之を信ぜす、何んとなれば之を信ずるは亦た彼の惡風評を製造すると同じければ也、只だ吾人は時務評論の平生正々諤々なるを信愛するが故に則はち其如此く言ふ所ろ亦決して惡意に出でざるとを確信するもの也。

○夜　　　　思

深夜寂々只だ吾が心の鼓動するを聽く、時に歌ふて曰く

心清知睡少、氣定覺神凝、但有二無愧一、何妨百不能、獨將如醉客、研冷欲生氷、兀倚遺身世、東窓待日升。

嗚呼自ら愧るなきもの幾干ぞや、吾人甚はだ酔倒を愛す、惟へらく人々凝念遂に安身立命の大覺を爲す、之れ靈意大定にあらずや、余をして若し酔倒たらしめんか、日本人が悉とく熱信純正なる基督教徒となるを見ば大ひに躍こぶべし。

○國風音樂

高崎五六、雨宮綾太郎の兩氏は、大日本國風音樂會と云へるものを發起し、本邦現存の琴曲唱歌謠曲の中に就て、吾國風の正脉となるべきものを撰み、改良すべきものは添作を加へ且つ新作をも爲すの都合にて、去二十二日芝紅葉館に於て其發會式を催うしたり。箏の沈幽なる、尺八の悲壯なる、笛の清朗なる、琵琶の悲凄なる、皆愛すべし、此等の器に和するに新文明の高雅雄大なる歌を以てせば、日本の音曲亦改良しがたきにあらず。然れども今后の國風音樂を作らんとするものに於て、若し彼の壯大なる洋琴、雄快なる軍樂を混用するとを爲さずんば、之より以后の日本人は、將に其の感慨を許するの音なきに啁泣せんとす。

○新　　　　　觀　　　念

厭忘、不平、沈鬱、萍々の社會、將に決裂して新世界を現ぜんとす、政治社會に壯士と云へるものあり、文學社會に氣慨詩と云へるものあり、音樂社會に薩摩琵琶あり、遊技に劍舞あり、此等の現象或は恐るべく、或は喜こぶべく、或は安んずべく、或は咜むべし。

○劍舞を觀る　　　　　　　　　　　　　　　か　　す　　み

妾は過る日の明治學院文學會に登り、數多の論說を拜聽し文章を誦まるゝを承はり鳥の宜似に眩めき太とき御聲音に耳しひたるなんど感じ侍ると渾はなりしが最后の劍舞を見て威痛やる方なく狹き袂を嚙しめて爽快の淚止め敢ず侍りき、昔我兄弟の兒島高德の組劍其の手を唱て櫻に文字かく所ろに至り妾は胸を叩き、昔我兄弟の仇を復する所ろ枕頭梁葉の妹背梁を生じ、取わけテンニツシの六百騎を詩歌二つに譯されたる三十凱旋の目ざましきには、劍ひらめくとき嗚呼やと呼び、三叉結接するとき思はず手を拍らはなはだ失禮いたし侍りき、先生平生琵琶を好ませ玉ふが劍舞は何如か思し召すや伺ひ度有中上候。

○花柳夫人

啻に米國の新聞紙のみならず、英國の新聞雜誌に至る迄で切りに評判され、當時米國交際社會に非常の才名を得たる陸奧全權公使の令閨に關して、去廿一日の「日本」新聞は實に左の如く記したり、

去る月の事なりとか米國の新聞は米國駐劄の我特命全權公使陸奧宗光君の令閨は花柳社會に生長せし人にして所謂る藝妓なること揭げたりしが其後間もなくして何人の投書なりけん同新聞紙上に於て陸奧公使の令閨は花柳社會の生長には相違なきも元來日本花柳社會の藝妓は歐米諸國の所謂る藝妓とは大に其性質を異にするものにして日本の社交上之を賤業視せざるものなることを辨明したりと云ふ西洋の藝妓は社交上果して如何なる地位を保つや否や之を知らずと雖も本邦に於ける藝妓の地位は社交的の問題漸く進步したる今日に於ては逐次世上一般の擯斥する所となりしと雖も陸奧氏が結婚の當時即ち日本社交上の問題未だ發達せざりし時に於て藝妓と云へる一部の社會が果して世間より如何なる待遇を受けたりしやと問はゝ吾儕は遺憾ながら擯斥されたりと云ふを得ず却て當時の形迹に於て藝妓を迎へて其伉儷となすは一時上等社會の流行なりしと云ふを得べきが如し果して如此なれば既往の出來事而も文化の未だ發達せざる時代の出來事を以て大勢の變遷したる今日に之を咎め立てするは實に不通の言なりと云はざるべからず然れども外人は能く此事情を首肯するの明ありや否や吾儕は茲に至て只だ本邦社交的問題の發達の遲緩なりしを惜むのみ。

然れども外國の公使などにすべき人の細君に付ては、深く其素性を質し皆を要す、

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

右の如き事を外國にて暴露さるゝに於ては我國の府下に便所を美しくしたりとて何の効能あらんや。

〇支那亞片商業　五月三日英國下院に於てサミウヱル、スミス（具氏改進黨）氏は支那に於ける英國の亞片貿易を非難し、第一此は英國より强ひたるもの也、第二此は支那人民に毒を與ふるもの也との兩論點により、英國王は速かに之を禁止するの政を布き、來る天津條約に於て此事件に付き協議すべしとの案を出したり。ピース氏賛成し、マックリアン等の論辯ありしが、決を採るに及び一百六十五人に對する八十八人の少數にて遺憾ながら消滅したり。

〇家政學校卒業生　去年秋初めてボストン府バークレー街に設立せられたる、基督教女子青年會に屬する家政職業女學校は、過月に至り第一回卒業生六名を出せり、此校の初めて設立せらるゝや皆な其効能の有無をすら疑いたるに、此の一學年間に學び得たる所ろは、調理、買出、裁縫、計算、看護、保姆、健全學、大工等の仕事にして大いに世人の注目を惹き輿論をして賞賛せしむるに至りたり。

内　地

〇養育院窮民の理髮　京橋區新富町三丁目二番地理髮業植木豐吉は養育院窮民の狀態を憫察し向ふ一ヶ年間毎月十七日の休業日に窮民の理髮をなし度旨同院へ申入れ既に去る十七日には同院へ出張し男女幼童五十四人の理髮、丸剃、頭剃、等をなしたる趣誠に奇特のとこ云ふべし。

〇鐘ヶ淵紡績會社の女工　同會社は過般既に新築工事を落成したるより十二歳より十五六歳までの女工八百名を募集中なるが府下のみにては斯く多數の應募者もなきより勢州度島尾州名古屋等へ募集に出掛け去る十七日の如きも五六十名の婦女を尾州より連れ歸りたりとの事なり。

〇看護婦の雇用　客月三十日を以て黴毒病院を廢止せしに就ては別に各遊廓に同病を設くる筈に付其看護婦には東京慈惠醫院の看護婦講習所卒業生を採用せんとて目下取調中なりと。

〇夫婦會　櫻井郁次郎、竹內元正兩氏の催ふしにて去る廿六日江東中村樓に於て夫婦會を開かれたる由なるが當日の來會者は夫婦百組ほどなりしと云ふ。

〇海岸女學校　築地明石町の同校にては本日卒業證書授與式を執行し生徒の英語討論、英語唱歌、英語演說等を催ふす由。

〇產婆會　東京產婆會にては去る十八日京橋區役所內議事堂に於て月次甲會を開き相磯𢘟、中村鐵二、木庭榮昇三氏の演說ありて當日出席したる會員は二百五十餘人なりしと云ふ。

〇唱歌教習法の改正　唱歌速成講習は是まで男女丁年以上の志願者と同時に授業し來りしが其筋にては丁年未丁年を問はず男女混交の授業法を廢止せんとの說あるよし。

〇上毛矯風會　同會が殊勝にも熱心なる希望を以て此の紛雜極りなき社會に生れ出でし以來其日は俗濁しこ雖とも皆々として矯風正俗の事に歩を進めつゝあるは感服の外なし本月八日十日の兩夜には當地の花街柳巷とも稱すべき横山町に於て會員勝山、山本、寺澤、宮崎、三ッ井の諸氏か社會の汚俗を痛論し大に人心を感動せしめたり然るに横山町邊にては已等が稼業に障害ありとや思ひけん演舌を爲すべき家宅を貸すことを拒み或は演舌中に石を擲つ者ありて種々の妨害を試みたりと云ふ。（上毛時事）

〇盛岡婦人會及び婦人矯風會　婦人會は岩手縣知事の夫人を始め重もに官吏の夫人を以て組織し編物裁縫西洋料理等を研究し衛生、育兒、經濟、道德等の講義あるよし目下會員は六十餘人にて會日は毎月二回講義は月一回なりとぞ婦人矯風會は例會は毎月二回にして矯風の方法より矯風の運動等を相談し又は有益なる經驗等を話し互ひに德義上の智識を交換し隔月演說者を聘し矯風の目的に關したる演說を聽くよし會員は三十餘人にて幹事は松本かん子書記は梶山なを子本堂たか子會計は木村しな子田久智梅子の諸氏なりと

〇密渡航者豫防の計畫　と題號を掲ぐるより寧ろ海外淫賣の爲め出稼する婦女に對する慈善の計策とも稱すべきは這回熊本縣下有志家が貧女の爲めに一工場を設立せんとの企圖是なり元來我政府にては密航者に對する取締は隨分嚴密を加へらると雖も臨機の奸策を設け法網を脫漏する者今に尙ほ其跡を絕つ能はず此輩の渡航傳は殊に長崎港を以て冠とすれども密渡航者中十中の八九は熊本縣下天草郡內の者を以て最も多しとす抑我同胞姉妹が海外に行いて斯る醜業を營み國辱を釀すの原因たるをも顧みざるは皆衣食の窮乏を告ぐるの已を得ざるに出づるものなれば活路を得るの道あらば斯かる賤業を營まんが爲めに海外に出る者なかるべしとの事にて終に右の計畫に出でたる者なる由。（十九日東京公論）

〇黴毒病院長定る　今度吉原に新設の私立黴毒病院長には誰がなるかと頻りに氣をもみし醫者等もありし由なるがいよ〳〵本鄕の元幹親梅病院長戶上現宗氏を依賴して月給金百圓を與へ其の他檢查醫五名看護婦十名薬局員三名をも更に雇入れたりとまた深川洲崎にては同副長たりし中村氏を金六拾圓にて雇ひ入たりと云ふ。

〇婦人救正會　越後高田にては大道長安氏其他の發企により婦人をして精神の快樂を得せしめ以て救正の快樂を得せしめ以て救正の精神を發揮し所謂劣弱の疑團を解くを目的とし救正淨聖を以て標準とし婦人救正會なるものを設立したり。

〇女生徒の梅毒　愛媛縣尋常師範學校女子部の生徒中に梅毒患者を出したりとて目下右生徒の品行上に付き取調中なりと云ふ。

〇山口女學校　は大日本教育會山口部會員中一二有志者の設立する所にして尋常中學校の學科程度を斟酌し女子に適切なる學科を授け又た生徒の望に應じ裁縫編物等の手藝を授くると云ふ。

生徒募集廣告

一今般(廢暑中休暇)高等科前期普通前期後期男女子共臨時募集候條志願者七月廿五日限願書差出ス可シ　但兩校規則ヲ望ム者ハ郵券四錢ヲ要ス

一從前之通リ兩校ノ學科兼修スルヲ得可シ

本郷區駒込追分町　私立**東京唱歌専門學校**

○高橋五郎著　**いろは辭典**

漢英對照ノ部上製金參圓八拾錢○和漢雅俗ノ部第二版上製金貳圓○見本ハ郵券送付アレハ呈ス……

博聞本社……日進堂……圍々社……大倉……丸善

歐米貴婦人社會に非常の好評を博せし束髮用頭飾

新奇發明 晴雨計花簪

●此花簪は此頃世上に尤も好評を博したる光映晴雨計の作用に依り頗る優麗に仕立てたるものにて其奇怪なる活動力あること恰も吾人情感に依て自ら顏色の變映するが如く晴曇風雨の氣象に感じ交々其光色を變ず其艶麗優美なる例ひ春夏秋冬全世界の萬花を溶解混製する事あるも遠く及ばざるべし此妙品一度世に出るや轟々の喝采實に偶然にあらず

●轉瞬變映す虚實得て端睨すべからず誰れか奇と呼び妙と叫ばざらんや蹈舞○宴會○劇場○公園の遊歩凡べて諸人集會の席等に於ては容色無比の觀を呈し人をして羨望驚愕せしむ

●世の開明に進むや婦女の裝飾亦改進せずんばあらず此バロメトリク花は有功無功の優美品なれば世の貴女頭飾品に尤も適應せり

正價　一本に付

並品　廿五錢

中品　三十錢

上品　三十五錢

其外種々御好みの品あり

關東一手大賣捌所　東京神田區小川町六番地　**大坂工藝會支店**

●**賣捌所**　府下各勸工場　**花簪店**

●**光映晴雨計**　特別大形一圓郵税八錢同中形五十錢郵税六錢普通大形卅錢郵税六錢同小形郵税四錢　も**同樣賣捌仕候**

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

遞信省認可

交詢案內

（催促する勿れ郵劵十錢送れ委細に申來れ）

●雇ひたき方（甲）

十二	下婢	年齢廿歳より五十歳迄の基督信者を雇入度者あり
十五	召使	家内の手助けとなり小兒の世話をなすべき年少女子を雇ひたし尤も諸書算筆を學びたき志あるものを望む
十六	召使	重に小供の世話及裁縫等にして家事の手助けとなるべき年少の女子を雇ひたき所あり但官員の御内なり
二〇	取締	基督教信徒にて年齢三十才四十才なる獨身の婦人にして女學校ニ寄宿し寄宿生徒の世話を爲し得る者を備入れ度處あり但し算筆並に日本裁縫に心得ある者
二一	中働	年齢廿五才位にして一ト通り裁縫の出來るものを一圓以上の給金にて雇ひ度處あり

●雇はれたき方（乙）

六	奉公	地方師範學校卒業生にて學費に困むに就ては可成西洋人宅にて兩人協力勉學傍雇へれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし
七	裁縫	年齢廿三にして家内の手助けとならんが爲め内職に裁縫に雇はれ度き者あり華族樣か町家ならば大家のかたき内にて築地邊ならば通いても宜しとのと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し
十三	教師	栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御内にても教授に雇はれたきものあり可成くは麹町か駿河台邊を望む
一九	召使	裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督兼留守居樣の者に雇はれたし
二四	奉公	年齢廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣輕の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし
二五	裁縫	裁縫は重もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御内に教師に雇はれたし
二八	奉公	普通小學科卒業の者にて（年齢二十二才）產婆業を營まるゝ基督信徒の家に無給にて雇はれ余暇に產婆術を學び度ものあり
二九	奉公	年齢十四歳にて基督教信徒の家（可成は西洋人）に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き毎日四五時間英語學の修業致したし
三〇	通辨	年齢廿四歳にて貴婦人方の英語の通辨として雇はれ度ものあり
三一	奉公	廿一二才のキリスト信者にて裁縫を教へ家内の手助けをなし四時間通學を爲し得る家に無給にて雇はれたきものあり

發兌

六月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
七月。	六日	十三日	二十日	廿七日	
八月。	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
九月。	七日	十四日	廿一日	廿八日	

定價

一册。六錢　郵税。一錢　（但府内無郵税）
十册。五十八錢郵税。十錢　（同前）
半年分　一圓四十三錢　府外は　一圓六十九錢
一年分　二圓六十錢　府外は　三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を蔽する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

一行　一回　（廿七字詰）　前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post yen [illegible] six months; yen 3.12 per annum, in advance.
Edited and Published by [illegible] Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. [illegible] YOSHI CHO, Kyobashiku, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町駸々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町眞明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西内大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年六月廿七日印刷
明治二十二年六月廿九日出版

東京京橋區日吉町八番地
發行所　女學雜誌社

編輯兼發行者　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐